

2020年8月2日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 目次哲也

奏楽 田口恵実

前奏

招詞 ローマの信徒への手紙 第10章10-13節

讃美歌 讃美歌21-210（来る朝ごとに）

交読 詩編100篇（p. 109）

祈祷

聖書 マルコによる福音書 第12章28-34節

（新約聖書 p. 87）

讃美歌 讃美歌21-351（聖なる聖なる）

説教 「ふたつでひとつ」

場所は、エルサレムの神殿です。次々とイエスさまと律法学者やファリサイ派、サドカイ派の人たちとの間に論争が続けられました。おそらくそれを、最初から関心深く興味をもつ

て耳をそばだてて聞いていた一人の律法学者がいたようです。イエスさまとサドカイ派と復活について論争があり、最後にイエスさまは「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている」とはっきり言われました。もしかすると、この律法学者はそれを聞いたからこそ、心動かされ、どうしてもイエスさまにお尋ねしたいという思いにかられたのかもしれませんが。28節、「彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた」。この「立派に」と訳されている言葉は、元々の意味は「美しい」という意味ですが、もうひとつ訳すと「見事」といえます。そうすると、イエスさまが見事に答えておられる。だから、この律法学者は感心した、その答えに感服したのでしょう。

もうひとつ言えば、イエスさまがふたつの掟について言われた言葉を受けて32節で、「先生、おっしゃるとおりです」と言っていますが、ここにも実は、この「立派な」という言葉

が出てきます。「先生、立派に言われましたね」「先生、お見事です、感服いたしました」とほめています。そして、この「見事です、先生」という受け止め方を、イエスさまの方でもう一度受け止められて、そして34節で「あなたは、神の国から遠くない」と言われました。これからイエスさまは十字架につけられて殺されてしまう。甦りのいのちの道に向かって歩まれる。それはすべて神の恵みの支配を打ち立てるために集中しておられる神のわざです。そこに神の愛が注がれる。その恵みのご支配、今始まる神の恵みのご支配からあなたは遠くない。それどころか、あなたはまるで、神の国の入り口に立っているように、いちばん近い人だとイエスさまは言われました。ここには、イエスさまご自身さえも、「あなたは見事だ」と言われた、そんな互いのやりとりが、ここでなされているようです。

そうするとわたしたちはこんなふうに考えるかもしれません。自分は果たしてイエスさまから「見事だ」と言っていただけのような信仰生活を送っているのだろうか。見事だ、と言

っていただけるかどころか、もしかすると、自分の信仰は実によくぐらついているのではないか。いや、ぐらつきっ放し、と言ってもいいかもしれない。そうすると、何をもって見事だ、とっていただけるというのだろうか。牧師だったら、あるいは信仰生活を何十年も続けて来られた方であるなら、不安もないし、ぐらつくこともないのだろうか。わたしはそうではないと思っています。ここで言うならば、信仰とは、イエスさまのお言葉、み言葉に対して、「イエスさま、お見事です」と答えることができる心に立ち帰ることではないでしょうか。何度でも。

「あなたは、神の国から遠くない」とイエスさまは言われました。そうすると、ここで思い起こすのは、イエスさまが子どものようにならなければ神の国に入れないとされた、お言葉を思い起こします。そうであれば、この律法学者は、幼子から決して遠い存在ではないと思います。彼は律法学者ですから、きっと幼い頃から、神について、律法について研鑽を積ん

で知識も教養も豊かな人であろうと思います。けれど、だから初めて、イエスさまのお言葉の見事さに心打たれるような理解を持つことができた、あるいは反応することができた、というのではないと思います。もしそういう人であるなら、彼以上の人物は他にも周りにいた可能性があります。もっと上手に論争をふっかけて、イエスさまを負かしてやろうと考えていた人もいたかもしれません。けれど、この律法学者は、まさに幼子のように、イエスさまの言葉の見事さ、その美しさに心を打たれた。だから、「先生、見事です」と応えることができたのです。

さて、その律法学者が尋ねたことは、あらゆる掟のうちで、何が一番ですかということです。どうしてそんなことを尋ねたのでしょうか。当時のユダヤの掟には、しなければならぬ命令の掟が 248、してはいけないという禁止の掟が 365 あったと聞きます。ユダヤの家庭に育った人であれば、小さい時から聞いて、教わっているのですからかなりの数を覚えているかもしれません。とはいえ、相当な数です。そうすると、613 の

掟があるのだけれど、ただ覚えればいいというのではなくて、そもそもたくさんの掟は、人間がきちんと生活をするための姿勢を整えるものであるはず。とすれば、まず 613 の掟が語っている急所、中心となるべき掟があるはずだ。まずこのことを心得ていれば大きな間違いを犯すことはないのではないか。どうかしてその秘訣を教えてもらいたいと考えることはあったのではないか。

もしかするとこの律法学者は、イエスさまが「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」と言われた言葉をどこかで聞いていたのかもしれませんが。というのも、これに対して律法では、「自分が他人にされたら困るということを、他人にしてはならない」ということで、イエスさまはこの掟を逆転させて答え、教えておられるからです。もし、彼がそうしたイエスさまの答えにあるような、見事な神についての知識を持っておられるなら、掟について急所となるべきこととは何かについても教えて下さるに違いないと思ったの

かもしれません。きつこの律法学者自身、ずっと考えていたのだと思います。神さまからの掟とは、何か。それは、神さまがお造りになった人間が、健やかに生きることができる道はこれだ、と示すことに違いない。皆も、そして自分もその戒めを一所懸命に守っているのだけれど、どうもその急所がよく分からない。そんな思いがあったかもしれません。

そして問われてイエスさまが答えられたのは、愛することでした。愛することに心を注ぎなさいということです。そしてその愛を、神を愛する掟と、自分を愛するように隣人を愛する掟のふたつを示されました。このふたつはどちらも旧約聖書に出てきますが、同じ箇所ではありません。第一の掟は申命記（6：4）、第二の掟はレビ記（19：18）です。

よくよく考えてみると不思議なのは、第一の掟は何かと聞いているのですから、ひとつだけお答えになればそれで良かったように思います。ところがイエスさまはここで二つの掟を

あげられました。つまり、ふたつ大事なことがある。しかも一見別々のように見える掟を、ここでは結びつけておられる。イエスさまの中では、この第一と第二の掟の順序は決めておられるのかもしれませんが、少なくとも神を愛することと、自分自身を愛することを前提に、その自分自身を愛するのと同じ愛をもって隣人を愛することは、ひとつだと言っておられる。一見ばらばらに見えるこの二つの戒めを、イエスさまは結びつけておられるし、またこの二つは、ふたつで一つだと言われる。どちらかに集中したら、もう一方は集中できなくなるというものではないと言われているようです。もし二つが別々で、わたしは神さまを愛することに一所懸命だから、隣人への愛についてはちょっと勘弁してくださいと言う人がいたら、それは神さまへの愛そのものが間違っているということになります。

そうすると、隣人を愛するとはどういうことでしょうか。レビ記（19章）を見ると、とても具体的に書かれていることが分かります。たとえば、穀物やぶどうを収穫する時は、全

部集めてはいけないというのです。どうしてか。畑を持つことができない人、自分の食べ物を得ることが難しい人のために、残しておきなさいと言います。あるいはまた、「**耳の聞こえない人を悪く言ったり、目の不自由な人の前に障害物を置いてはならない**」とあります。現代に生きているわたしたちは、すでにそんなことはしていない、と言えるでしょうか。今置かれている状況下ではもっとひどいことになっているのではないかとさえ思われます。誹謗中傷、差別発言はないと言えるのか。よく考えなくても、差別をしていないし、弱い立場の人への配慮ができている世の中だと言えるような人間が、この世の中にいないことに気づきます。だとすれば、神さまの戒め、掟は、実は古くて、いつも新しいと言わなければならない。こうしたことを全部ひっくるめて、自分のように隣人を愛しなさいと言われる。わたしたちは皆、もし自分の目が不自由な時に、思いがけないところに置いてある物に躓いたら、わたしたちは腹を立てるか悲しむはずです。けれど、そのことに気づいていないわたしたちであり、それは、自分自身を愛するように、隣人を愛

することができていないし、しでしかないのではないか。けれど、では、どうして愛さなければならないのか。そこがとても大切なところですよ。

どうして隣人を愛さなければいけないのだろうか。隣人も、わたしたちと同じように大切な人間、尊いのちを持っている人だから、という理由があります。神さまに造られた存在だからということもあります。けれどそうしたことをまとめて、レビ記では何と言っているか。たとえば、穀物を残しておきなさいという戒めのところで、最後にこう書かれています。

「わたしはあなたたちの神、主である」(10節)。それから、目の見えない人の前に障害物を置いてはいけないという戒めの根拠には、「あなたの神を畏れなさい。わたしは主である」(14節)とあります。そして、「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」と言った後には、「わたしは主である」と書いています。そうすると、目の見えない人を軽んずることは、神を軽んじている。わたしは神さまを信じています、神さまを畏れてい

ますと言いながら、隣人を軽んじているとすれば、それは神さまそのものを真実に礼拝していないことになる。ここに、神を愛することと隣人を愛することがひとつになります。

現実のわたしたちの姿、隣人への有り様を問われるときに、いかにこの掟から遠く離れていることかと思わされます。では、出来ていないことをわたしたちは嘆き、うなだれるしかないのでしょうか。

ここでわたしたちに愛することの掟を語っておられる主イエスは、これからどうなるのか。これから、十字架につけられます。十字架につけられ、殺されます。それはまさにうなだれるしかないことであり、そこで、十字架上で主が審かれるのです。愛するようにとの戒め、掟において、全く破綻している人間として、イエスさまご自身が審かれます。そして、わたしたちが裁かれなくても済む。主イエスの愛は、そこに集中しました。わたしたちを愛し抜かれました。神は、その独り子をわ

たしたちに与える愛をもって、この世を愛してくださいました。それは、わたしたち一人も滅びないで済むためだと聖書は語ります。滅びないで細々と生きるためではありません。うなだれて生きるためではありません。愛することに生かされて生きるためです。そこに生かされていることを、私たちは、皆神の国から遠くないことを、主イエスが約束してくださいました。そのことを信じて願います。お祈りいたします。

讃美歌 讃美歌 21-342 (神の霊よ、今くんだり)

献 金 讃美歌 21-65-2

報 告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と

聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>